

Title	内村鑑三傳(益本重雄 藤澤音吉共著)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.159- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

内村鑑三傳

(益本重雄 著
藤澤香吉 共著)

棺を蓋ひて事定まるといはれるけれども、しかし實は棺を蓋うても定まらないのである。史上における人物の評傳をみて、評者によつて非常にちがつてゐる。甚しきに至れば惡意の曲解によつて史的人物を誣ひるものすらある。堂々たる官學の大學教授にして國史を専門とする文學博士が、昭和の今日に至つてなほ福澤先生の著書中に所謂楠公權助論がありとなしてこれを批難してゐるが、かくのごときは單なる世評にまどはされたものであつて、史學研究法の初歩も知らざる迷論でなければ、にくむべき曲學阿世の暴論と言はねばならぬ。それはとにかく偉大なる人物においては、凡人には理解しがたい多くの特異性を有するが故に、簡単に評價しがたいのであつて、傳記のむづかしさはこゝにある。單にその人の外的事業を年代順に羅列したのみでは、よき傳記とはいはれない。その人の思想信仰性格を解剖し、その内生活を明らかめ、時代との關聯を説かなければならぬ。そこには犀利な史眼と公平な態度と同情ある理解とを必要とする。即ち史學者としての冷靜な態度とともに、他方において記者と傳記されるものとの間に暖い人格的交渉がなければならぬ。

われらの目においては、内村鑑三先生はわがキリスト教界における巨人であり、近世日本の生んだ世界的偉人であつた。先生はキリスト者であるとともに、熱烈な愛國者であつた。しかるにこの愛國者が一時非國民としてあらゆる迫害と譏諷とをうけたのであつて、その迫害の急先鋒であつた井上哲次郎博士が後年不敬事件をひきおこして指彈されたのは、誠に人生の皮肉を思はせるものである。さて内村先生のキリスト教の特色は日本のキリスト教と無教會主義とを唱へたことであつて、わがキリスト教界における先生の地位は、恰も鎌倉時代の佛教における法然親鸞日蓮の地位に類するものがある。火を吐くがごとき熱烈と何ものをも恐れざる不屈な精神とは、他宗の折伏に猛烈であつた日蓮の戰鬪的態度に髣髴たるものがあり、その純福音的信仰においては、法然、親鸞の他力信仰と類するものがあつた。彼等が佛教をして日本佛教たらしめたごとく、先生によつてキリスト教が日本人の宗教となつたのである。

札幌農學校出身者として農學・理學を修めながら、傳道者、聖書學者として一生を了へ、愛國者でありながら、不敬事件、非戰論の故に迫害をうけ、その生涯の波瀾にとむのみならず、激越なる性格を有し、また科學者にして詩人であつた預言者内村先生は、今日においてもなほ正當に評價されてゐるとは言へず、その傳記の困難であることはいふまでもない。益本氏の本書は、この巨人の傳記としてなほ不足の感もないことはないが、極めて公平にして同情があり、まともな最初の傳記として内村先生の生涯とその事業とを知るにまさき手引書である。(獨立堂書房發行、定價一

圖半)(松本芳夫)

印度に於ける禮拜像の形式研究

(逸見梅策著
東洋文庫發行)

一般に宗教藝術の美術史的研究が本來如何なる方法に基づいて爲さる可きかに就いては、さまで安易に且つ簡單には片附けられないものがある、嚴密なる學的要求を充たさん爲めには、論者の中に自づから幾多の立場や觀點の相違が生ずることであらう。併し如何なる藝術觀照の場合にあつても、先づ第一に當然踏まなければならぬ基礎的諸階程のあることは明かである。宗教藝術としては就中、教理學の内容的方面からする考察と、圖像學の形式的方面からする考察とは蓋し不可缺的なものと云はねばならないであらう。

本書の主題とする所は正しくこの後者に屬するもので、著者の所謂形式研究とはかゝる意味を現はすに他ならないと思はれる。又印度に於ける禮拜像といふのは、佛教にあつては佛、菩薩及び明王、波羅門教にあつてはその諸神像のことで、これらをば前者に於ては特に密教の本經と儀軌、後者に於てはプラーナやシルパシヤーストラ等を根本資料と仰ぎ、従つて時代的には穆多王朝より波羅王朝に及ぶ約九百年に限定しつゝ、その間に於ける印度美術史發展の諸相の中に痕附けんとするのが本書の目的である。かく著者が比較的後期の發展に限定したことは「穆多像は尊像の形

式を整備したる點に於ては健陀羅及び摩菟羅派の美術に負ふ所多大なるも、美及び理想精神の表現手法に於ては全然古代純印度派の有するものを復興せし派なりと思惟するものなり、」といひ、「波羅像を形式方面より略言せば、印度佛教像の最後に有せし型の完成時の像なり。その型は密教經軌の所説に悉く合致する様式なり、」といへるのがその根本理由である。

その點に就いて論者の中には遽かに首肯し難きものを多々見出すことであらうけれども、經軌や乃至造像の規範書たる工巧明典による圖像學的規定を主とし一般に藝術作品の純粹なる觀照は寧ろ從におく立場にあつてはこのことは當然の歸結であると云へるであらう。茲でこれらの工巧明典中特に著者が「金玉の價值」あるとするものは例の漢譯造像量度經並びに續補である(これは西藏經より工布查布師が反譯し、それに増補を加へたもの、乾隆七年版本となる。尙ほ「國華」第四十編に逸見氏の和譯が連載されてゐる)。従つて本書の敘述の順序も大體に於てこの經典に準據されてゐることは云ふ迄もない。

本論に這入つて第一には像量篇がある。こゝでは初めに印度の度量制に就いて極めて詳細に記述してゐるが、蓋し諸禮拜像を製作するに當りその換量を確定することは先決問題と考へられる爲めである。勿論既に經軌中に殊或はその他の語を以つて像量を示すことがあるが、それはたゞ像の全高を意味するに過ぎなく、面輪と身高との比例を示すといふ意味ではない。かういふ意味の人體の比例即ち換量の記載があるのは佛典中獨り造像量度經あるのみである。例へば佛像は元來十換度であるべき筈なのに、偶々この